

巻 頭 言

2003年実施の算数数学分野の新教育課程改訂の作業が98年2月から本格的に始まった、と伝えられている。この改訂の作業は、文部大臣の週5日制一年前倒し実施の発言を受けて、98年秋に中間案が公表され、来春に告示というスケジュールで進行中、とある情報筋は述べている。

算数・数学分野は、その指導に際し直接使うかどうかに関わらず電卓やコンピュータの普及に伴い、その指導内容や指導法に大きな変革が迫られている。このとき、過去の例から即断すれば、中間案＝決定であるだけに、僅か半年の議論で十数年先までの教育内容を決定してしまうことに大きな不安を感じる。もっと腰をすえた議論を行うことを関係者に強く要望したい。

以下、私の新教育課程への希望を3点にわたって述べる。

数計算では、その指導内容は現行通りであるにしても、その指導の意味合いは大きく変えるべきであると考え。即ち、従来の「計算が確実にできる」から、「数計算の工夫」に主眼をおく、そこでは数の多様な見方を要求するが、へと視点を変更したい。また、 n 進法の考えを文字のコーディングや帯分数の加減算と結びつけて指導したいと考える。

97年11月発表の教育課程審議会中間のまとめでは、空間図形での指導内容の削減や学年先送りが言われている。これは、1年生で向きや曲面の概念が獲得でき、2年生で箱の見取り図を描くも、円を利用しての曲率の考えを使うことができ、3年生で3角錐や4角錐の展開図が描くことができる、……、を見ない議論である。中間まとめに携わった人たちの空間図形分野での教材開発の努力不足や子どものもつ力への認識の乏しさをこそ反省すべきであって、子ども達の能力不足を理由にこの分野の指導削減を打ち出すことは正しくない。また、これらの様々な実践から、今世紀初頭以来の直観幾何の考えに疑問をはさみ、それぞれの年齢にふさわしい論理や推理力をもとにこの分野の教育内容の改訂をこそ提案すべきであると考え。

数学教育ではモデリングの研究が世界的に進んでいる。これらの研究成果を生かし、「総合学習」は算数数学の教育内容とも深く結びあつて指導したいものである。この意味で、私は総合学習の特設化には反対で、教科学習を核に、他の教科学習で学んだものも活用しながら総合学習を展開したいと考える。

(森川 幾太郎)